

Camp O-AT-KAにおける伝統性

—指導者としての参加経験をもとに—

○高橋 伸(国際基督教大学)、橋本和秀、廣田治久(余暇問題研究所)

キーワード：少年キャンプ、組織キャンプ、キャンプの伝統性、Camp O-AT-KA

1. はじめに

本報告は、アメリカ合衆国における夏期少年長期キャンプに着目し、20世紀初頭に設立され、現在も運営している歴史のあるキャンプについて、その伝統性の所在を明らかにすることを試みたものである。

日本においては、民間がキャンプ地を固定し、組織キャンプとして、その運営を継続することはきわめて至難である。さらに少年少女を対象とした長期キャンプの運営ということになると、ますます困難となる。もちろんアメリカ合衆国と日本では、政治・経済・文化などに大きな相違があるのは事実である。しかしながら、経営のノウハウとは別に、こうした歴史のあるキャンプには、少年少女や親を引き付けるなにものが存在し、それがキャンプ継続の原動力のひとつになっているものと考えられる。キャンプの伝統性を究明しようとしたのも、このような理由からである。

周知のように、アメリカ合衆国における組織キャンプは、1861年のガナリー・キャンプ(Gunnery Camp)と言われているが、現存するこの種のキャンプでもっとも古いキャンプは、キャンプ・ダッドレー(Camp Dudley)の1885年設立である。19世紀末から20世紀初頭までにはキャンプ運動が台頭した時代であり、その多くがアメリカ東部ニューイングランド地方に集中している。これはニューイングランド地方が、イギリスの植民地として、アメリカ独立以前から名実ともに政治・経済・教育・文化の中心となっていたからである。とくに移民の増加とそれに伴う社会事業活動が、さらに拍車をかけたといえよう。

報告者らは、かねてからニューイングランド地方のキャンプを視察してきた。とくに高橋は昨年(1997年6月～8月)メイン州セバーゴ湖畔にある“キャンプ・オーアトカ(Camp O-AT-KA)”において、シニア・スタッフのアシスタントおよびアーチェリー・インストラクターとして、キャンプ全体の運営に関わることができた。このキャンプの特徴的なプログラムとして「伝統的プログラム」を掲げていることもあり、その事例を中心として、キャンプと伝統についての検討を実施するに至った。

したがって本報告の目的は、キャンプ・オーアトカの事例にみられる伝統的行事の背景や意義を考察し、観察によって得られたキャンプ全体の伝統に対する雰囲気づくりおよびスタッフ・キャンパーの反応を報告しようとするものである。

2. キャンプ・オーアトカの概要

設立：1906年、米国聖公会(Protestant Episcopal Church)デネン神父(Father Dennen)の創設。メイン州における現存キャンプで第3番目に古いキャンプ。

名称：Camp O-AT-KA。Camp O-AT-KAは“*Our Aim To Keep Achieving*”(成し遂げ続けることを旨とする)の頭文字をとった。

所在：Rt.114, Box 744, East Sebago, ME, 04029, USA

運営：Camp O-AT-KA Inc. (法人組織)

面積：約12万3千坪、セバーゴ湖畔に面している。

施設：キャンパー用キャビン20棟、本部棟、食堂、教会、講堂などを含め約30棟。

その他スポーツ施設、水上施設、クラフト施設など。

収容：150名

対象：少年7歳より16歳まで（年齢層により3ユニットにしている）。

期間：6月中旬～8月中旬（3週間・4週間・7週間の3期に区分）

*1997年は6月22日～8月10日、6月16日～21日／トレーニング・準備

費用：4週間／\$2550、3週間／\$2175、7週間／\$3750

CIT（8週間）／\$1800、（1997年度）

スタッフ：ディレクター以下約40名（メンテナンスを含む）

6～10名キャンパーにカウンセラー1名、Jr.カウンセラー1名

特徴：伝統的プログラム、キリスト教的環境、優秀な指導陣

日課：午前・・・水泳、野球、バスケット、サッカー、ラクロス、アーチェリー、ライフル、ヨット、水上スキーなど。

午後・・・昼寝、各種スポーツ、ステンドグラス、木工、釣竿作り、プラモデル作り、スチールドラム、キャビン対抗試合、自由水泳など

夜・・・旗とり、カウンセラーハント、ロープスコース、ビデオ鑑賞、スタンツ大会、ゲーム大会、テント泊など。

特別行事：儀式プログラム・・・日曜礼拝、戴冠式、裁きの法廷、秘密会議、騎士徹夜の祈り、晩餐会など。

スポーツ大会・・・王様の日スポーツ大会、グリーン&グレースポーツ大会

野外旅行・・・自然公園アドベンチャー・ツアー（3泊4日）、釣り、ラフティング、登山など。

その他・・・遠足、野球観戦、ダンスパーティー、スポーツ対抗試合、海水浴など。

3. キャンプ理念とその背景

キャンプ・オーアトカは、もともと英国国教会派に属していた米国聖公会系の教会が設立したキャンプであり、キリスト教としての精神的基盤の上に成り立っている。

さらにもうひとつの精神的基盤がある。それは、彼らがアメリカ人として独立したとはいえ、ニューイングランド地方の祖先はイギリスということになる。したがってその創立理念は、遠くイギリス中世にさかのぼることになる。少年たちへの創立者の夢は、イギリス中世紀の“騎士道精神”に見出した。そのモデルとなった原点は“アーサー王伝説（Arthurian Legend）”である。

この伝説は、アーサー王（King Arthur）とその宮廷における円卓の騎士たちの物語を総称するもので、中世ヨーロッパ文学の最も重要な主題であったといわれている。そしてそのなかに“宮廷風恋愛”や“聖杯伝説”などが加えられ、一代物語群として発展したものであった。その発展の理由には、その中に含まれる倫理観、恋愛感や騎士道などが、その時代の文化的・精神風土にマッチしたからといわれている。

中世の騎士（Knight）は、貴族と異なり叙任によって選ばれる者であった。それゆえ騎士になり得る者は、精神的には清貧・貞潔・服従・礼儀・公正・寛大・崇敬などの要素を兼ね備えた軍人でなければならなかった。“聖杯伝説”にみられるアーサー王宮廷における円卓において、最も高潔な騎士として座ったギャラハード公（Sir Gakahad）のみが、

聖杯を見つけることができたという物語である。

このキャンプが、少年キャンパーに求める理念は、この理想の騎士としてのギャラハード公のような騎士道の精神を持ち合わせる人物となるように育てることにある。キャンプ全体の雰囲気やプログラムも、その理念に集約されている。創立から90年以上を経過し、時代も変化してきたにもかかわらず、伝統とは、昔から引き続いて行われていて、その社会を特色づける有形・無形の習慣や考え方とするならば、このキャンプ・オーアトカは、まずその精神的核としてのキャンプ理念の継承が、このキャンプの伝統を築き上げていることは明らかである。

4. 伝統を感じさせる諸要素

1) キャンプのたたずまい

約12万坪の敷地を有するこのキャンプは全体が松の林に覆われ、その一部は周囲約40キロのセバゴ湖に面している。その敷地内に約90年の面影を残した質素なキャンピングが散在している様子は、外界から絶された空間を作っている。

特に伝統的な雰囲気を残すものとしては、本部棟(Bungalow)がある。古い別荘風の建物であり、家具や調度品もアンティークなものが置かれている。石造りの暖炉や創設者の肖像画、鹿の壁掛けなどがあり、スタッフやカウンセラーの憩いや談話の場所となっている。また講堂(Great Hall)には、ギャラハード公の伝説にまつわる絵がかけられ、食堂には古体英語でかかれた詩の彫り込んだ板がはめ込まれている。

古い物を大切に保存しながら生活している様子が、キャンパーの視覚にも訴えながら伝えようとする雰囲気がみられた。

2) スタッフのリクルートとトレーニング

キャンプ・スタッフを大別すると、シニア・スタッフ、カウンセラー、プログラム・スタッフとなる。シニア・スタッフとプログラム・スタッフは教師が多い。かつ毎年参加しているので、全体の運営方法を熟知している。カウンセラーは、ほとんどがキャンパー時代から参加し、CIT(Counselor In Training)を経た大学生である。

このようなスタッフの状況の中でのトレーニングは、キャンプ開始前1週間が当てられ、キャンプ場内の整備やプログラムの準備などを行いながら進められ、とくに1から10までを教育しなくても、その機能が十分果たされている。

したがってディレクターをはじめスタッフは、このキャンプに再び帰ってきたという雰囲気であり、すでにキャンプ開始前には、そのチームワークが出来上がっている。

3) キャンパーの募集

スタッフと同様な傾向がキャンパーにもみられる。キャンパーのほとんどがリピーターで占められる。もちろん競争の激しい世界であり、毎年のPRは欠かせないことではあるが、このようなりピーターによっても、キャンパーのリクルートが行われている。彼らは、スタッフと同様に“夏の家に帰ってきた”という感覚であり、カウンセラーも知っており、友人も多く、毎年同様なプログラムでありながら、それをエンjoyする居心地のよさを感じている。これらもまた伝統を築き上げる大きな要因になっていることは明らかであろう。

4) 朝の集いと礼拝

朝の集いの形式や礼拝については、とくにキャンプ・オーアトカに限ったことではない

が、アメリカにおけるキャンプの伝統でもある。朝の集いは国旗掲揚と誓いが、必ず行われる。これはアメリカが合衆国として、各国の移民によって成立した過程において、いかにひとつの国の市民としての意識づけをするかという建国時代からの努力のあらわれが習慣化したものと考えられる。またアメリカはキリスト教国といわれるが、他の宗派・宗教に対しても寛容である。毎日曜日には礼拝が行われるが、カトリック信者やユダヤ教徒に対しては近くの教会に出席させる。市民意識や宗教的感覚も、このような形式を継続しながら受け継がれている。

5) インセンティブ

最も伝統的で、キャンプ理念を具体化するプログラムとしてギャラハード・プログラムがある。キャンパーは騎士になる事を望み、ギャラハード公のようになることを目指すのである。最終的にはカウンセラーの中から選ばれるアーサー王である。アーサー王はキャンプの象徴であり、憧れの的となる。この目標意識や憧れがインセンティブとしてキャンパーの自主性や自立心を促進させる。さらにキャンパーはキャンプ生活の中で、騎士としての素行や態度を身につけてゆく。

6) 特別行事

行事で最も象徴的なのは、戴冠式、裁きの法廷、秘密会議、騎士徹夜の祈りなどである。これらはアーサー王をはじめ、スタッフやカウンセラーが扮した大司教、司祭、騎士、十字架持ち、盾持ちが衣装をまとい、教会などで行われる。

法廷では、年齢の低いキャンパーが王や司祭の待つ暗い部屋につれていかれ、王は学校や家など普段のふるまいや行動を問い、騎士としてのところがまえを論ず。また、徹夜の祈りでは、騎士見習いは儀式のあと深夜まで教会堂に残って祈る。参加者は緊張感ともに真剣に取り組み、伝統を肌でかんじてゆく。

5. まとめ

以上キャンプ・オーアトカの伝統性を考察してきたが、創設から 90 余年経過した現在においても、営々と受け継がれている現状を次のようにまとめられよう。

1) 理念・テーマ・プログラムの統一性

この統一された伝統の継承が、キャンプ全体の基本となっている。これはキャンプの目標を明らかにするとともに、人間性、人生観、行動規範などの全人格的に関わる事柄が明示されているのである。

2) スタッフ・キャンパーの継続性

毎年参加するスタッフ・キャンパーにとっては年間を通しての年中行事となっており、彼らの生活のひとつの基盤となっているのである。事務局では、毎年キャンプのイヤーブックや機関紙、インターネットのホームページを発行し、年間を通してコミュニケーションをはかる努力がなされている。さらに同窓会も組織されていて、多方面からキャンプ運営をサポートしている。

3) 温故知新の思想

新しいこと、プログラムの多様化もキャンプの楽しさを高める要素ではあるが、キャンプが子どもの成長を促す具体的な活動である以上、古くても良いことは大切に受け継ぎ、継続してゆく価値観もわれわれには必要ではないだろうか。したがってオーアトカの伝統性から得られる示唆も少なくないと考える。